

関西学院同窓生と連携したグローバルキャリア教育の開発

大岡 栄美 (社会学部)

要 旨

グローバルに活躍する関西学院卒業生 (OB・OG) と連携した、キャリア教育開発の可能性と課題の検討を研究目的とする。近年の日本社会においては、日本を出て海外で学ぶ留学生数の減少や海外勤務を希望しない若者の増加など、若い世代の「内向き志向」が指摘されている。その一方で企業の国際展開を担うグローバル人材育成が、高等教育の担うべき社会的役割として一層期待されている。各大学は文部科学省の後押しもあり、多様な留学プログラムを充実させ、海外留学を経験する日本人学生数は再上昇傾向に転じた。しかしながら、世界的な学習フィールドでの「グローバルな学びの経験」を将来のキャリア設計へと架橋するキャリア教育プログラムの体系化や構造化が待たれている。

本研究では、グローバルキャリア教育開発において、学生にとって身近なロールモデルとなる可能性を持つ「同窓生」の存在に着目する。シンポジウム開催による同窓生によるキャリア講演の実践とその学生感想アンケートの分析を通じ、学生のグローバルマインドの啓発・育成やグローバルなキャリア形成への動機づけに資する同窓生のキャリアパス提示の効果を検討する。同時に、教員に求められるコーディネート機能をFDの観点から分析する。その結果、「同窓生」という人的資源を活用したキャリア教育開発は汎用性が高く、実践的・実学的高等教育の推進が期待できることが明らかになった。

1. グローバル人材育成とキャリア教育

1.1 グローバル人材育成への社会的要請

近年高等教育の果たす社会的役割として、「グローバル人材育成」への期待が高まっている。この動きの背景には日本の景気低迷に伴う、海外に留学する日本人学生の減少、就職後に海外勤務への挑戦を好まない新人社員増加への危惧がある。日本人の海外留学生数は2004年の8万2945人をピークに減少し、2010年には5万8060人にまで落ち込んだ。産業能率大学(2010)の「ビジネスパーソンのグローバル意識調査」では、「海外で働きたいとは思わない」と回答したものが20代の6割を占め、特に中国などの新興国や、東南アジアやアフリカなどの途上国を忌避する若者が8割に上った。国際的な企業間競争激化の中で、「国内従業員のグローバル化対応能力不足」を問題視する日本企業は多く、一部の企業はすでに留学生の雇用や海外拠点での外国人社員の直接雇用に踏み切っている。しかしながら、世界的な高度人材獲得競争は激烈を極め、各企業を支

える優秀な日本人材の確保が急務となっている (中西 2014)。この状況を背景に、日本人学生の国際的視野を広げ、日本の若者をグローバル社会の中で逞しく生き抜く「グローバル人材」として育成することへの社会的要請が高まっている。

2010年を境に、日本の産業界が求める人材像としての「グローバル人材」についての政府や財界による定義づけが報告書や提案を通じて行われていった (藤山 2012)。例えば、日本経済団体連合会 (2011) は『グローバルな人材の育成に向けた提言』の中で、①チャレンジ精神、②外国語によるコミュニケーション能力、③柔軟な異文化対応力を、グローバル人材に求める要件として掲げた。また文部科学省による「産学連携によるグローバル人材育成推進会議」では、最終報告書となる『産学官によるグローバル人材の育成のための戦略』のなかで、グローバル人材を「世界的な競争と共生が進む現代社会において、日本人としてのアイデンティティを持ちながら、広い視野に立って培われる教養と専門性、異なる言語、文化、価値を乗り越えて関係を構築するためのコミュニケーション能力と協調性、新しい価値を創造する能力、次世代までも視野に入れた社会貢献の意識などを持った人間」と定義している (産学連携によるグローバル人材育成推進会議 2011:3)。

グローバル人材育成を高等教育の社会的責任とする機運が高まる中、日本企業の国際競争力の維持と持続的な発展を支える優秀な人材の確保を目指し、政府は大学自体の国際競争力強化とグローバルなキャンパスづくりを支援する政策をここ数年で矢継ぎ早に開始した。2009年度には2020年を目標に留学生受け入れを30万人に拡大する「留学生30万人計画」と連動した「国際化拠点大学 30 (グローバル 30、または G30)」がスタート、国内13大学が選出され、留学生受け入れ対策の整備、海外事務所設置などを推進することになった。続く2011年には「大学の世界力展開強化事業」を開始した。年間5千万円程度の助成金により、米国、欧州、アジアをはじめ、世界各国の大学と協働・連携し、日本人学生の海外留学と外国人学生の受け入れ・交流を促進する、各大学独自のユニークな留学プログラム開発支援が行われた。さらに2012年4月からは大学教育のグローバル化を目的とした体制整備を重点的に財政支援する「グローバル人材育成推進事業」、2014年には「スーパーグローバル大学創成支援事業」が開始された。

この結果、各大学は大学に受け入れる留学生数・割合の増加はもちろん、日本人学生の海外留学生数・割合の増加を数値目標に掲げることになった。また英語で実施する授業の増加、外国人教員の採用数増加などの客観的指標による到達目標などを掲げ、グローバル人材育成に向けた大学改革を遂行することになった。

1.2 関西学院大学におけるグローバル人材育成への取り組み

関西学院大学も文部科学省による重点支援の対象となり、実践型「世界市民」育成プログラムという形で、グローバル人材育成につながる様々な教育プログラムをすでに展開している。2004年度からは国連ボランティア計画 (UNV) と提携し、国連ユースボランティアを海外に派遣し、国際社会貢献活動によるグローバルな学びの機会を学生に提供している。また文部科学省の平成23年度「大学の世界展開力強化事業」に採択された教育プログラムとして、日加大学協働・世界市民リーダーズ育成プログラム「クロス・カルチュラル・カレッジ」が開始された。カナダのマウント・アリソン大学、クイーンズ大学、トロント大学と協働し、日加両国の学生が寝食をとも

にしながら課題の発見・解決に向けて協働する科目群の学びを通じ、グローバル社会を発展・成長させるリーダー育成を目指す、ユニークな教育プログラムである。参加学生には留学渡航費や宿泊費の一部が補助される。

さらに関西学院大学では2012年度には「グローバル人材育成推進事業」、2014年度には「スーパーグローバル大学創成支援事業」にも採択されたことで、日本人学生の海外留学を増大化させる体制を強化し、より体系化された実践型グローバル人材育成システムを構築すること、つまり世界的視野をもって産業界で活躍できる人材の育成に向けて大きく動き出している。140もの大学国際教育機関との協定による中・長期の多彩な留学プログラムの提供、充実した海外インターンシッププログラムの提供など、世界的学習フィールドでの学びの選択肢が拡大することは非常に望ましい方向性である。しかしこうしたプログラムの問題点として、「グローバルな学びの経験」を将来のキャリア設計へと架橋するキャリア教育との連動が弱い点が指摘できる。

1.3 グローバル時代のキャリア教育の必要性

そもそも日本におけるキャリア教育は、高等教育修了者と労働市場とのミスマッチによる若者の離職率の高さや、若年労働者の完全失業率の高さ、非正規雇用者の増加などの問題を背景にスタートした。若者の職業的自立、学校から社会・職業への円滑な移行を実現するため、キャリア教育は「一人一人の社会的・職業的自立に向け、必要な基盤となる能力や態度を育てることを通じて、キャリア発達を促す教育」と定義されている（児美川 2014）。

日本におけるキャリア教育の歴史は浅く、本格的な導入は文部科学省の「キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書」が出された2004年以降とされる（友松 2012:16）。キャリア教育は特定の職業に従事することを目的とする実践教育である職業教育に対し、一人一人の発達や社会人・職業人としての自立を促す、「生き方」についてのより長期的な教育を指す（友松 2012:16）。特に正規雇用の縮小、非正規雇用の拡大という雇用の流動化という労働市場の構造変化の中で、若者が生涯にわたる自らの学び方、働き方、生き方を考え、主体的に備えるための「人生」や「生き方」を教育内容に含めることに特徴がある。

グローバル人材の育成にあたっては、こうした一般のキャリア教育に加え、「グローバルマインドの啓発・育成・実践を通じて、自覚と自律に基づく持続的なキャリア形成を支援する教育」が必要であることが指摘されている。具体的には、異文化の中で生活しながらビジネスをしていくことで得られるやりがいや挑戦、海外生活の中でのワークライフバランス実現、転職や起業も含め、異文化環境の中で主体的にキャリア形成するために大切な心構え、マインドを学ぶことである。海外のフィールドでの学びの先に、大学卒業後の職業選択としてどのようなキャリアがあるのか、就職後に企業の中でどのようなグローバルに展開される仕事があり、仕事を通じてどのようにキャリア形成がなされるのか。グローバルな学びの経験を将来のキャリア設計へと架橋するには、「グローバル人材」として実際に社会で活躍する具体的なロールモデルについて学ぶ機会がさらに必要とされている。

1.4 グローバルキャリア教育における同窓生ネットワークの活用

グローバルキャリア教育の目的について、友松 (2012) は、「グローバルマインドの啓発、育成、実践を通じて、多文化の下で問題解決や価値創造に取り組もうとする人材を養成すること」とし、その方法として、第一線の実務家・研究者などキャリアモデルとなる講師を選定し、講師や志を同じくする意識の高い参加者との対話や接触から受け取る「インスピレーション」、これによる行動や規範の模倣、価値観の伝播が必要であると論じている。友松は、「講師は学生から見れば『雲の上の人』であるが、身近に接することでこの敷居を乗り越えていく」ことが大切であると論じている。筆者もインスピレーションの大切さについての異論はないが、講師の人選に関しては、学生による行動の模倣、規範の共有、価値観の伝播をスムーズに進めるにあたり、学生にとってより「身近」と感じられるロールモデルとなる可能性を持つ「同窓生」の存在に着目したい。

近年、同窓会は大学運営にとっての「資源」として、その社会的機能に注目が集まっている。例えば高田 (2012) は法人化された国立大学の運営にあたり、同窓会に、1) 大学の活動への理解を深め、社会に対する説明責任を果たすチャンネル、2) 募金活動・基金の拡充・寄付金の増加などの財務支援、の役割を期待している。中島 (2011) は福井大学による帰国留学生の海外同窓会12支部の組織化の動きに着目し、大学同窓会が「地域社会貢献」・「ビジネス」・「国際化支援」において果たす重要な社会的機能を詳述している。具体的には、上海支部帰国留学生支部メンバーによる福井県企業と現地ビジネスの橋渡し、UAE・ブラジルにおける日本紹介・福井大学セミナーの開催、同窓会支部と共同事業による在校生の訪問受け入れ（講義・工場見学）などの実現である。牧・宮地・樺澤 (2011) は、大学発ベンチャー支援における卒業生・同窓会の活用について考察し、在校生への「教育」と「ネットワーク提供」における同窓生の役割の重要性について論じている。具体的には、起業支援・起業家育成のための卒業生を大学に紹介、卒業生有志による起業支援組織・グループを設置、起業関連の寄付講座の設置、公開講演・セミナーの講師の担当などである。

黄 (2007) はこうした同窓会が生み出す協働行動を「社会関係資本」の一形態として捉えている。黄によると、ライフステージの一過程で「学校」という同じ組織に所属した同窓生は、その後の人生においても同窓会での校歌、応援歌斉唱などの儀式、校旗、教員や所属組織に関する思い出話を通じ、卒業後も全員が同じ学校文化を共有する共同体に属するという一体感や親密感を保有する。そのため、実際には、ジェンダー、世代、出身、現在の社会階層、移住形態や移住年数などの差異があるにもかかわらず、共通の文化（母校の文脈）の共有による「同一化」が生じ、信頼と互酬性に基づく関係を形成しやすい。その結果、必要な時に同じ共同体に所属する（と見做される）構成員に必要な資源を動員する社会関係資本を蓄積している。さらにこうした社会関係資本に基づく資源動員は、未来係数（＝将来的に再度出会う可能性）による互酬性の規範に支えられ、現在出身校に在籍する在校生の支援に対しても拡大して提供されやすいと指摘する。

ところで関西学院大学では在校生の教育において、同窓生ネットワークの活用は進んでいるのであろうか。残念ながら、筆者が本研究を行う以前に実施した2012年度大学共同研究「ソーシャル・キャピタルとしての大学同窓生ネットワークー世界で活躍する関学卒業生のネットワーク実態把握」では、関西学院大学には海外に21の同窓会海外支部があり活発な活動を展開しているにもかかわらず、海外同窓生が在校生の教育の充実や関西学院大学のグローバルな国際競争力強化

のために十分に活用されていないことへの不満の声が同窓生側から寄せられた（海外支部は現在では26支部に増加）。そこで本研究においては、在校生にとっての社会関係資本の動員という観点から、「同窓生」という人的資源を活用したキャリア教育開発とその効果について検討したい。

以下、2013年11月27日に開催されたグローバルキャリアシンポジウムの概要と学生感想アンケートの分析を通じ、共通の文化（母校の文脈）の共有による「同一化」が生じやすい、同窓生（OB・OG）をゲスト講師に迎えたキャリア講演会の教育的効果を検討する。

2. シンポジウム開催にみるグローバルキャリア教育開発の可能性

2.1. 関西学院大学におけるグローバル・セミナーの展開

関西学院大学では、「世界市民の育成」を目指し、グローバルに第一線で活躍する政財界のリーダー、ノーベル平和賞受賞、各国大使などを招聘したセミナー、シンポジウムなどをすでに活発に開催している。例えば一般にも開放されている国際学部連続講演会では、在学生の国際事情理解の促進をめざし、2015年度に駐日パキスタン全権大使、駐日イスラエル全権大使、シルクドソレイユディレクターなどの招聘を行っている。さらに、元世界銀行副総裁である西水理恵子氏や、神戸をベースにグローバルに医療ビジネス展開をする、シスメックス株式会社家次恒氏（代表取締役会長兼社長）を招聘した「グローバル時代に若者に期待すること」と題した講演会など、国際的なビジネスや市民社会で活躍できる人材の育成につながるキャリア講演会を実施している。こうした取組みは、将来のグローバルな活躍を射程に捉えた学生生活の充実に刺激を与えるうえで、欠くことのできない重要な機会を提供している。しかしながら、これらのゲストスピーカーを、自らの大学時代の学びや研鑽の身近なロールモデルとするにはやや距離感があるという指摘もできよう。

そこで目を向けたいのが、関西学院同窓生の存在である。前述のように筆者が行った、2012年度大学共同研究「ソーシャル・キャピタルとしての大学同窓生ネットワーク—世界で活躍する関学卒業生のネットワーク実態把握」においても、世界のビジネスシーンでユニークな活躍をしている関西学院OB・OGが多数いるにもかかわらず、在学生が卒業生のリアルな声に触れ、自分の将来のキャリア形成の身近なロールモデルとするような機会が少ないことが問題点として挙げられた。

現在全学的には、キャリアセンターが実施する「キャリアゼミ」で、「世界市民」として活躍する社会人OB・OGとのセッションが講義の一部に取り入れられている。しかしより継続的な取り組みとしては、経済学部における「キャリアデザインと仕事1」の科目のみが、キャリア教育の中に同窓生との連携を取り入れているに過ぎない。この科目では、関西学院大学経済学部卒の企業トップや現在中堅幹部となった同窓生を講師として招聘し、学生時代の学び、自分史、社会での経験、学生が身に付けておくべき力や考え方についての講義を行っている。講師陣も経済界から多様な人材が揃えられ、キャリア教育という観点からは非常にユニークかつ有意義な講座内容となっている。しかし、1) 経済学部生のみを対象、2) 経済学部OB・OGのみを講師として招聘、3) グローバルなキャリアデザインについては焦点を当ててはいない、といった課題もある。

2.2 「今、伝えたい！未来に羽ばたく後輩たちへ」シンポジウム

そこで、関西学院同窓生と連携したグローバルキャリア教育の今後の開発を念頭に、全学部生対象に世界で活躍する同窓生のライフストーリーを共有し、グローバルなキャリア形成に必要なバイタリティを学ぶシンポジウムを開催した。シンポジウムは2013年11月27日(水)、関西学院大学創立125周年記念シンポジウムという形で実施した。「今、伝えたい！未来にはばたく後輩たちへ世界で活躍する関学同窓生からのメッセージ」と題し、第1部はパネリスト講演、第2部はワールドカフェ方式での討論・交流を学部の垣根を越えて実施した(図1参照)。

パネリスト講演者としては、関西学院大学経済学部卒の栢田裕弘氏(関西学院同窓会元英国支部長)と関西学院大学商学部卒の川内英治氏(関西学院同窓会バンコク支部長)に依頼した。第1部のパネリスト講演ではそれぞれのパネリストに、ご自身の在学時代の学びからスタートし、海外でのキャリア形成についてお話しいただいた。両パネリストとも、学生時代はそれほど真面目な学生ではなかったというエピソードが飛び出し、学生にとって親近感を得やすい導入となった。その後は、栢田氏からは日本とは異なる欧州の市場での日本製品セールの難しさ、川内氏はサラリーマンから転職してのタイのバンコクでの会社起業に至るまでの挑戦、また経営を行ううえで現地での人材育成の課題などについてお話しいただいた。グローバルビジネスの第一線で活躍するお二人ならではのバイタリティあふれるエピソードが共有され、現役学生に大いに刺激となる講演となった。16時50分という遅い開始時間にもかかわらず、当日準備した座席134席では着席できない学生もでた。席がなく参加をあきらめて帰らざるを得ない学生がでたことは、こうした企画に対する学生の関心の高さを示しているだろう。シンポジウム終了後に回収したアンケートでも、約7割の学生が「非常に満足」と回答している。

第2部は、現役学生が一方的に聞き手に回るというスタイルを回避するため、ワールドカフェ方式でのディスカッションの時間を設けた。このワールドカフェでは、シンポジウム講演の内容を受ける形で、「グローバル社会の中で求められる世界市民力」という議論テーマを設定した。具体的には自らの海外留学、ボランティア、インターン経験なども踏まえた上で、「今若者のう

125 関西学院創立125周年記念シンポジウム

**今、伝えたい！
未来に羽ばたく後輩達へ**

世界で活躍する関学同窓生からのメッセージ

開催日時：11月27日(水)16:50 開演(入場無料*先着順)
会場：関西学院大学レセプションホール

第一部 16:50～ パネリスト講演
第二部 18:10～ ワールドカフェ
「グローバル社会の中で求められる世界市民力」

19:30終了予定

【主催】関西学院大学「関西学院卒業生と連携したグローバル・キャリア教育の開発」共同研究会
【共催】関西学院同窓会

図1 シンポジウム概要

ちに、なにをしておくべきか?」、「現在の日本（日本人）に何が欠けているか」を着席したテーブルごとに、コーヒーを片手にくだけた雰囲気できつぱらんに、ゲストスピーカーや教員も交えて話し合いをしてもらう形式をとった。狙いは意識の高い参加者同士での対話の促進による「グローバルマインド」の啓発である。

開催前は、その日初対面の、所属学部なども異なる学生同士で議論し合うことで、自分の大学生活を省察する仕掛けがうまく機能するかについて危惧もあったが、予想に反し、議論は盛り上がりを見せた。議論終了後に共有された「今若者のうちに、なにをしておくべきか?」、「現在の日本（日本人）に何が欠けているか」についての意見では、各グループから「貪欲さ、リスクマネジメント力、自国のことを知る、自分の力で動く、一つのことで良いから熱中する、新しい場に飛びこむ、語学力よりも伝えようという熱い気持ちをもつこと」などが、自分も含めた今の日本人の若者に必要なこととして出された。第1部のパネリスト講演への満足度よりは下がるが、第2部のワールドカフェに対しても全体の約6割が「非常に満足」と回答した。「どちらかといえば満足」という回答者と合わせると、回答者の87%が第2部のワールドカフェについても評価している。

シンポジウムとそれに続くワールドカフェ方式での交流会では、パネリストと学生はもちろん、既に様々な海外経験を持つ学生同士の意見交換が進んだことが意義深かった。特に今回は本共同研究に関わった多様な教員の呼びかけにより、普段は交流機会の少ない関西学院大学神戸三田キャンパス（主に総合政策学部）所属学生と西宮上ヶ原キャンパス（商学部、経済学部、社会学部、国際学部、人間福祉学部など）所属学生の交流機会となり、同じ学生の体験から自らの大学生活について振りかえる時間となったのが思わぬ効果だった。

また今回は講演担当者が同窓生ということがあり、学生にとっては先輩、パネリストにとっては後輩という気安さも手伝い、春休みにはパネリストの経営する会社でインターンをしたい、あるいは訪問したいという希望が学生側から出されるなど的一幕もあった。ビジネスシーンで活躍する海外在住同窓生の存在を広く周知するとともに、在校生と同窓生のネットワークづくりを目指したシンポジウムは一定の成果をもたらしたといえよう。実際「ご自分のキャリア形成を考える上で、同窓生（OB・OG）の話聞く機会は参考になりましたか」というアンケートについての回答も、回答者68名のうち、78%が「非常に参考になった」、20%が「どちらかといえば参考になった」と回答した。また、今後このようなシンポジウムがあれば、また参加したいと考えますか、という質問に対する回答でも、65%が「また参加したい」、35%が「どちらかといえば参加したい」と回答しており、同窓生の学生時代の学び、社会でのキャリア形成、学生が身につけておくべき力や考え方についての率直な意見などについて学ぶ機会への潜在的なニーズが存在することは明らかである。

2.3 学生アンケートからみるグローバルキャリア教育への期待

次に詳しく、アンケート調査から得られた参加学生の意見を質的に分析していく。学生の意見としては大きく分けて、1) 同窓生の活躍からの刺激、2) 自身のグローバルな活動にむけた目標の明確化、3) 他学部生との交流の意義、に関する意見が得られた。

1) 同窓生の活躍からの刺激

第1に、「普段なかなか出会うことのない関学のOBさんのお話が聞け、すごく、自分達に身近で、頑張ろうと思えました。」という意見に代表されるように、通常同窓生の社会人から話を聞く機会がないので、こうした機会を増やしてほしいという要望が多く寄せられた。

- 卒業生の方の話をうかがう機会はなかなかないので、卒業生が活躍していることが知れてとても刺激になった。
- 同窓生の社会人の方からお話を聞く機会は初めてだったので、貴重な話をきけて良かったです。
- OBの方々と話す機会が今まで全くなかったので、とてもいい経験になりました。定期的なこういうシンポジウムを開いてほしいです。
- 実際に海外で活躍された先輩方と直接お話しする機会は全くないので、これからももっともっと開催してほしいです!!

またやはり、キャリア講演担当者が同窓生であるということの効果があり、学生がグローバルに活躍する先輩を「身近」に感じ、自らの学生生活の参考にしやすいという効果をもたらしていた。

- 今日お話しして頂いたお二人は「英語力はなるべく身につけるべきである」とおっしゃられていましたが、彼らの体験談を聞かせて頂いて何となくですか直感的に私に必要なのは体を張ること、ガッツを持つことだと感じました。私は大学での勉強がほぼ全てであると思い全力投球していましたが、それ以上に大切なことがあると思い知らされ、もう一度自分の体勢を見直す必要があることが分かりました。
- 講演会で聞いた内容が、とても新鮮で刺激を受けることができました。自分のしたい事や興味をもっていることに前向きに行動していこうと思うようになりました。

また就職活動を控えた3回生の参加者は下記の意見に代表されるように、真剣に自分のキャリア形成について考える時期にあり、多様な同窓生のキャリアに触れることのできる機会を設けることの重要性がうかがえた。

- 私は現在3回生で、就職活動真最中なのですが、自分のキャリアを形成する思考のモデルの1つとして、今回のパネリスト講演は非常に参考になりました。
- 私は現在3回生で就活がもうすぐで始まり、自分のキャリア形成について考えています。お2人の先輩の話をお聞きすることで、自分の進路選択の1つとして、自分の好きな仕事ができたらよいなと思いました

また今回のパネリストの2名に共通していたのは、必ずしも学生時代からエリート、目的の明確な学生ではなかったというエピソードであり、それでも学生時代の様々な経験、出会い、社

会に出てからの努力、挑戦で、世界での活躍に道を拓いたという点である。この点は自分とは関連性を見出しにくい、少数のエリートキャリアの講演を聞くよりもより有意義であったといえ、シンポジウムの開催にあたっては同窓生の人選が重要であることへの示唆が得られた。

- 普段聞けない様な OB の方々の貴重なお話が聞けて良かったです。当時は頭が良くなかったり、語学があまりできなくてもなんとか方法を探したり、経験していく上で乗り越えていけると聞いて少し安心しました。

2) グローバルな活動にむけた目標の明確化

今回のシンポジウムが単なるキャリアについての講演ではなく、「海外で働く」、「グローバルに活躍する」ことをテーマにもっていたことで、自分のキャリアを海外で展開することに興味関心を持つ学生にとり、「自分の今しなければならないこと」を振り返るうえで重要な機会となった。

- OB の方の話を聞かせて頂いていただく機会は今までもありましたが、今回は「海外」からの視点をふまえた貴重な意見を聞くことができとても刺激になりました。
- 未知の世界に飛びこむ大切さ、なぜ大切なのか、また、日本人の特徴を踏まえながら、今しなければならないことが明確に分かって、すごく良かったです。
- 卒業生の貴重なお話を聞くことができ、とてもいい時間を過ごすことができました。世界で活躍する方のお話を聞くことで、意欲が高まり、私も世界を通した仕事をしたいと思っているので、これからの就職活動を頑張りたいと思いました。今日のように、世界で活躍している先輩方のお話を聞ける機会がもっと増えればいいと感じました。
- パネリスト講演が現在の私たちにとってとてもためになりました。「グローバル」ということに対しての様々な視点が得られました。日本人はもっとガツガツいくべきだとも思いました。
- 「世界を股にかけると細かい仕事が大量に発生する。しかし細かい仕事をこなしてこそ、グローバルな人間になれる。」という言葉に共感した。
- グローバル化が叫ばれる現在、日本国内に閉じこもっているのは世界から取り残されてしまいます。しかし、海外に行くとはいえ、どうすればよいのか？何をすれば海外に行けるか？それらが分かりませんでした。今回のシンポジウムを通し、海外で活躍しておられる先輩方の話を聞いて自分は何をしたらいいのか、何が重要かという点についてアドバイスを頂けたのは貴重な経験になりました。

他方下級生に多かったのが、海外経験がないため、学生時代に「海外」に飛び込む勇気自体をもらったというものである。

- 私は海外へいった経験がほとんどなく、海外で生活するということは手が届かない憧れという位置付けでした。しかし、今回海外で活躍されている方々のお話を聞いたり、海外で様々な経験してきた他の生徒の話聞いて、未開の地に踏み出し、様々なことに挑戦してみたい

と思うようになりました。

- 私は海外経験がほとんどなく、海外とは未知の世界でした。その中で、海外についての話しを聞き、それについてディスカッションをしましたが、ほんの数十分のことなのに、とても勉強になり、海外への興味もでてきました、とりあえず、どこでもよいので、日本から出ることからスタートしたいです。
- 私は海外に行ったことが一度もないので、実際に海外に行った方の様々なお話を聞くことができたので、良かったです。なかなか、海外に行く勇気がでなくて一歩ふみ出せなかったので、これから頑張ろうと思います。

3) 他学部学生との交流の意義

また今回のシンポジウムのグローバルキャリア教育開発に向けての仕掛けとして試みたのが、第2部のワールドカフェ方式での議論と発表である。当日は同じテーブルについた学生7~8名程度と教員が、各テーブルに配置した学生ディスカッションリーダーを軸に、テーマでの議論を深めるという進め方を採用した。学生リーダーは予め、シンポジウム開催に関わった共同研究担当教員の推せんで決定しておいた。また遅い時間からの開催であったため、コーヒーと簡単な茶菓子を提供して打ち解けた雰囲気での進行を試みた。単にパネリストからの一方的な発信ではなく、それを踏まえた上で、短時間ではあるが学生からのアウトプットを求めた。同窓生である、既にキャリアで成功したパネリストはもちろん、同じテーブルに着いた、他学部生の積極性や自分の意見を発信する力、目的意識や意欲、などからも、将来のキャリアにつながる日々の学びをどう充実させるかについての省察を引き出すことが狙いであった。学生の意見からは学生同士大いに刺激を与えあったことが伺えた。

- パネリストの方の講演はもちろん、様々な価値観をもつ学生と議論できて良かった。
- 他学部、他学年、と様々な学生、教授と話す機会があり、非常に良かった。
- 他学生のすごさに刺激をうけ、まだまだ未熟だと感じました。
- 何事も挑戦してみようと思った。他学部の方などの話も聞くことができ、刺激をうけた。
- 自分とは違う考え方の人とふれて、多くの刺激をうけた。明確な目標をもって日々、物事に取り組みたい。
- 今後の学生生活の目標が今日のディスカッションをきっかけにできたので、これからも充実して学生生活を送れるようにしたい。
- いろいろな意見をお互いに交換できて良かったです、その中で多くのことを学べたし、何よりも、今自分は一体何をすべきなのか、グローバル社会で生き残っていくためにはどのようにすべきなのかを討論できてよかったです。

こうした意見からは、やはり一方的なインプットではなく、グローバルに活躍する先輩の話を知りたいうえで、自らはどう行動するのか、それを志を同じくする周りの学生と議論する時間を持つことの重要性が分かる。今後の学生生活の方向性を明確化する議論の時間を持ち、さらにアウトプットを引き出すことで達成感を提供することも鍵だろう。実際、シンポジウムに寄せられた

批判的な意見は、この議論とアウトプットにかける時間の短さを指摘したものがほとんどだった。以上、シンポジウム参加者へのアンケート分析からは同窓生によるキャリア講演実施による学生のキャリア意識の向上、海外への意識の高まりなど、グローバルマインドの啓発・育成やキャリアの明確化への効果が見られた。

3. 結論

2010年代に入り、景気低迷が長期化する中、海外に留学する日本人学生数が減少し、学生の内向き傾向が危惧されていた。しかし、近年の大学の国際競争力強化政策も追い風となり、海外での学びの機会を得る学生の数は回復傾向にある。またそもそも関西学院大学に関しては、中・長期の交換留学はもちろん、国連ボランティア、クロス・カルチュラル・カレッジをはじめとするユニークな短期留学プログラムも充実している。また海外で活動するNPO等に所属し、活動する学生が多い傾向にある。高等教育機関にグローバル人材育成が求められている現在、本当に必要なのはこうした海外経験を持つ多数の学生に、その経験を将来の自分のキャリアにどう生かすのか、学生時代の学びや経験とその後のキャリアデザインを架橋する教育プログラムの充実である。

本稿では、そうした試みの一つとして、大学同窓生ネットワークという社会関係資本に着目し、グローバルキャリア教育プログラムの開発の端緒としてのシンポジウム企画とその効果を検証した。その結果、「未来係数」に基づく互酬性の規範から、大学同窓生は将来同窓生となる後輩のために、自らの経験を共有すると同時に、在校生にとっては、同窓生により親近感を持って、自らのキャリア形成のロールモデルを見出すことが期待できることが明らかになった。学生側からのグローバルに活躍する同窓生の経験を共有する機会拡大への期待も大きかった。

しかしながら、今回のような単発イベント型のキャリア教育には限界があることも事実である。前節で詳しく考察したように、シンポジウム自体は学生がグローバルなキャリア形成を考えるうえで、非常に意義を持つものではあったが、1) 効果の継続性、2) 日常の学びや実践との連携、においては今後より体系的な大学教育への組み込みが模索されるべきだろう。これは、同窓生のキャリア講演に刺激を受け「目標を持ってこれからの生活に取り組みたい」という学生側の意欲が風化し、実際の学生生活の中で何の変化も起きない、ということが十分に考えられるためである。

イベント化を避けるためには、こうしたシンポジウムが他のキャリア教育科目と連携し、「構造化」されて展開されることが重要である。参考になるのは先述した経済学部での「キャリアデザインと仕事1」講義科目である。この科目には、1) 経済学部生のみを対象、2) 経済学部OB・OGのみを講師として招聘、3) グローバルなキャリアデザインについて焦点を当ててはいない、といった課題があることは指摘した。しかし、半年を通じて多彩な同窓生を講義陣に迎えている点で、単発に終わるイベント型シンポジウムの抱える課題を乗り越えている側面がある。

今後は、1) キャリアセンターなどが開講する全学的科目で、2) 学部の枠を超えてグローバルに活躍する多彩な同窓生を講師として招聘、3) 授業と連動する形で、関西学院同窓会海外支部所属のOB・OGの日本滞在期間中の公開シンポジウム開催など、系統化、体系化された形で連携のとれたグローバルキャリアセミナーが開催されていくことが非常に望ましい。キャリア科目履修者はもちろん、その枠を超えてより多数の学生に海外での学び体験を将来のキャリアに架

橋するプログラムの開発が待たれる。

最後に関西学院同窓生と連携したグローバルキャリア教育の展開において、教員に求められるコーディネーター機能について触れたい。今回のシンポジウム開催にあたっては、2013年度高等教育推進センター共同研究助成を受け、共同研究の一環として準備、実践が行われた。そのため、海外同窓生との連絡・調整はもちろん、シンポジウムの企画、広報、当日の会場レイアウトから資料配布などすべてにわたって、共同研究に関わる教員間の連携と協力の下に実現された。大学内では、特に海外同窓会支部のパネリスト講演者との日程調整などにあたって法人部校友課の協力は不可欠なものであった。また学生へのシンポジウムの告知にあたっては、広報室や各学部掲示板への掲示など、全学的なアプローチが求められた。シンポジウムの準備・企画は教員にとり、新たな教育プログラム開発や広報に活用できる大学内資源を学ぶというFDの観点から非常に有意義であった。しかしながら通常の授業外にこれらの準備を一手に引き受けることへの負担は大きいことも事実である。グローバルキャリア教育の充実には、キャリアセンターと校友課が連携する形で、シンポジウムや講演に登壇可能な同窓生のコーディネーター的役割を担当できる人材が大学内に配置されることが理想的だろう。「同窓生ネットワーク」という社会関係資本を活用したグローバルキャリア教育の有効性を考えると、本学の充実した海外での学びの機会を将来のキャリア設計へと架橋する構造的かつ体系的なキャリア科目の開発が待たれる。

謝辞

なお本稿は2013年度高等教育推進センター共同研究助成「関西学院卒業生と連携したグローバル・キャリア教育の開発」(研究代表者 大岡栄美・社会学部准教授)による研究成果の一部である。

参考文献

- 黄順姫, 2007, 『同窓会の社会学—学校的身体文化・信頼・ネットワーク』世界思想社。
- 児美川孝一郎, 2014, 「〈移行〉支援としてのキャリア教育」溝上慎一・松下佳代編『高校・大学から仕事へのトランジション—変容する能力・アイデンティティと教育』ナカニシヤ出版, 119-137。
- 高田英一, 2012, 「国立大学の運営における同窓会の位置づけの現状について—中期計画の記述の分析を中心に—」『大学探究』第4号, 1-9。
- 友松篤信, 2012, 『グローバルキャリア教育—グローバル人材の育成』ナカニシヤ出版
- 中島清, 2011, 「留学生同窓会の活動, その役割と方向性について」『福井大学留学生センター紀要』第6号, 1-9。
- 中西亨, 2014年「『質』が問われる海外留学」『WEDGE』(2014年5月20日), 40-44。
- 樋口美雄, 2012, 『国際比較から見た日本の人材育成—グローバル化に対応した高等教育・職業訓練とは』財務省財務総合政策研究所。
- 藤山一郎, 2012, 「日本における人材育成をめぐる産官学関係の変容—「国際人」とグローバル人材を中心に—」『立命館国際地域研究』第36号, 125-142。
- 牧兼充・宮地恵美・樺澤哲映, 2011, 「大学発ベンチャー育成のためのメンタープラットフォームにおける同窓会ネットワーク活用に関する研究」『映像情報メディア学会誌』65(3), 395-402。
- 日本経済団体連合会『グローバル人材の育成に向けた提言』2011年6月14日。
- 産学連携によるグローバル人材育成推進会議, 2011, 『産学官によるグローバル人材の育成のための戦略』2011年4月28日。